プラネットバーストー

＜目次＞

狙われた司令塔
セーラーマーキュリー散る
(イラスト＆SS　やえば)

…2～13

マーキュリーで見たかった
セラムンシチュエーション
(イラスト＆テキスト　やえば)

…14～15

ゲストイラスト
『集結！
セーラーマーキュリー討伐隊！』

千要よゆち 様　…17
いんふぇるの 様　…18
村田電磁 様　…19
(テキスト　やえば)

あとがき＆奥付　…20

18歳未満の方の購入・閲覧
および無断転載は禁止
また、本作品は性犯罪を
賛美・助長するものでは
ございません。

『おのれセーラー戦士…』
地球壊滅をもくろむ妖魔軍団は地球を守護する セーラー戦士達の度重なる妨害に苦戦を強いられていた。しかし…

「奴らは敵ながら見事なチームワークで歯向かってきます、ご覧ください、奴らの司令塔はこの娘です」

そう言うと水晶玉に映し出されたのは抜群の知能を持つ戦士達のブレーン セーラーマーキュリーの姿であった。

「まずコイツを始末すればセーラー戦士などただの小娘の集まり…そしてこの娘 セーラーマーキュリーを倒す術も既に講じております」

セーラーマーキュリーを狙った妖魔達の刺客が放たれたのだった…

狙われた司令塔
セーラーマーキュリー散る

「そうだ、それでいい。この連中を死なせたくないだろう」
「そうね、抵抗はしないわ。それで私はどうすればいいの？」
あくまで毅然とした態度を崩さず、妖魔を見据えるマーキュリー。

「くっ…」
「よし、いい心がけだ、セーラーマーキュリー」
夜の街に現れた妖魔、周りには多数の若者達が倒れている。
「こいつらのエナジーはいただいた。こいつらは既に虫の息、残りのエナジーを吸い殺されたくなければ抵抗をやめてもらおう」
闇夜に輝くような白いレオタードに身を包んだ少女戦士、セーラーマーキュリーは構えていた両手を降ろし抵抗の意思が無い事を妖魔に示した。
セーラーマーキュリーこと水野亜美、ＩＱ３００の類稀な知能を持ち、妖魔達と闘うセーラーチームのブレーンとして戦士達の中核を担っていた彼女。セーラーチームの度重なる妨害に遭い、対策を練った妖魔達はまず頭脳戦に長けるセーラーマーキュリーが単独になるタイミングを狙い、セーラーチームの戦力を確実に削ぐ事を企んだのである。
今日も日課の勉強会に参加し、帰路につこうとした矢先に建物全体を妖魔が襲撃し、亜美は同じく勉強会に参加していた若者達を守るべくセーラーマーキュリーへと変身し単身妖魔と闘う事となったのである。
「そうだ、それでいい。この連中を死なせたくないだろう」
「そうね、抵抗はしないわ。それで私はどうすればいいの？」
あくまで毅然とした態度を崩さず、妖魔を見据えるマーキュリー。
「言う通りにしたわ、だからこの人達には手を出さないで！」
マーキュリーの見据える妖魔の周りに力無く痙攣や呻き声を発する者達の姿が地球を守護する戦士として生まれた彼女に闘う事を止めさせたのである。
「天才的な頭脳の知略家と聞いていたが、所詮は勝ちに徹す事の出来ぬ、正義の味方気取りの小娘よ」
狙い通りにまんまとマーキュリーを単独で無力化させる事に成功した妖魔は満足そうに罵る。
「なに、お前はそうしてしばらくじっとしていればいいさ、貴様さえ手に入ればこんなカスどもに用は無いからな」
妖魔がそう言うとマーキュリーの周囲が禍々しく歪んだ。
「こ…これは…？はっ？！」
あっという間に歪んだ景色がどす黒いオーラをまとい、マーキュリーの身体を飲み込んだ。やがてマーキュリーを飲み込んだ空間の歪みが消失すると、辺りには妖魔とマーキュリーの戦意を削ぐ為にエナジーを吸われた者だけが残された。
「さて、セーラーチーム崩壊の為の最も重要な一手『セーラーマーキュリー抹殺』といこうか…こいつらに用はないが、どのみち地球は滅びるのだ、すぐに他の地球人も送ってやるから一足先に逝くがいい」
妖魔はそう言うと両手をかざし、力無くその場から逃げようとする周りの若者達の身体から光の粒子を集め始めた。

（痛みじゃない…それに電撃を受けた途端、身体中の神経が
熱を持って痙攣を始めたような…！動悸が…これは…胸と…
股間…？熱い…！ジンジンする…！）

「…ッ…ここは…？」
空間の歪みに飲み込まれたマーキュリーが目を覚ますと、そこは先程の景色とは違う、人工物が一切見当たらない不気味な歪みがそこかしこに発生する空間であった。
「目覚めたな、セーラーマーキュリー」
不意に妖魔の声が響く。
「どこ？どこに隠れているの？出てきなさい！」
一人で闘うのは得意ではない、しかし襲われた人々を救う為にはやむを得なかった。
（うさぎちゃん達ならさっきの騒ぎで何が起きたかは察してくれるはず、あとは私の居場所を報せる事が出来れば…）
妖魔達への戦闘態勢を取る構えを見せつつ、妖魔に悟られぬようポケコンを操作し、他のセーラー戦士に信号を送るマーキュリー。
「私を独りにするのが目的だったんでしょう？闘うわ！出てきなさいっ！」
あくまで戦士として闘う意思を見せながら他の戦士が辿り着いてくれる事を祈り、時間をかけようと心に秘めて構える。
「独りになっても勇ましい事だ、伊達に幾度も我々の邪魔をしてきてないな」
姿を見せぬまま、孤独な空間で襲撃に備える少女戦士に声をかける妖魔。
「だが、仲間から孤立した貴様など私が手を下すままでも無い。小賢しい頭脳など役に立たぬこの状況ではな」
頭脳戦が主戦場のマーキュリーにとって、単体での戦闘力で戦況を切り開くのは確かに決して得意な闘い方ではない。
「たとえ一人になっても私もセーラー戦士の一人！闘い抜いてみせるわ！」
毅然とした態度で返す少女戦士は構え、精神を集中する。
しかし
『バチッ！』
「あぅっ？！」
不意に空間に電撃が走り、マーキュリーを直撃した。
「こ…これは…ッ？！」
それはただの電撃ではなかった。凄まじい衝撃があったに関わらず、痛みも焼かれるような熱さも無い。しかし、代わりに電撃が通過した体内を別の熱さが焼き、マーキュリーは激しく痙攣した後にうずくまって悶絶した。
「バカな娘だ、貴様を簡単に仕留めるためにこの空間に幽閉したんだぞ、もう人質など無くても簡単に無力化できるさ」
未知の衝撃に悶えながら微かに妖魔の声を聞き電撃の正体を分析するマーキュリー。
（痛みじゃない…それに電撃を受けた途端、身体中の神経が熱を持って痙攣を始めたような…！動悸が…これは…胸と…股間…？熱い…！ジンジンする…！）
たった一発で動く事すら適わないほどの謎の熱さに全身を支配された少女戦士に妖魔の声がかかる。
「ククク…セーラー戦士もやはり女だな、こうなればもはや

拘束電撃が不意に解放し、糸が切れた人形のように
マーキュリーは元の真っ暗に戻った空間の地面に崩れ落ちた。
「そろそろ本番だ…貴様のエナジーをいただくとしよう」

敵ではない！先ほどの電撃の正体を教えてやろう。今、貴様が感じている熱さは『快感』、あの電撃は貴様の『女』の体に本能的に宿る『性』を受け入れる感覚を強制的に覚醒させる快感電撃だったのだよ」

これまでも妖魔との闘いはあった。しかし、これまでは、妖魔の攻撃は肉弾戦やエナジー吸引などであり、よもやこのような手段で戦士の力を封じに来るとはマーキュリーでさえ思いもよらなかった。なによりマーキュリー自身が自らの体がこのような快感を求めるようなもどかしさを宿す事など経験が無ければ予想も出来なかったからだ。

「計画通りセーラーチームの司令塔である貴様を消す。そうすれば残りの四人など少々腕の立つ小娘の集まりに過ぎん。いずれやつらのエナジーも奪い、セーラー戦士は全滅、地球も我々のものというわけだ」

思いがけない初めから自分一人を狙った計画に自らの行動の不用心さを後悔しながらも、この状況を打破しようとマーキュリーは試行錯誤するが状況は好転しない。

「さて、もう少し弱ってもらおうか」

妖魔がそう口にすると電撃が迸り、マーキュリーの両手足を捕らえ、空間に大の字に宙吊りにした。

「これは…何を…？！あああッッ！！！」

真っ暗の空間がまばゆい電撃で白んだ空間へと変わった、無数の電撃がマーキュリーの胸に、足に、股間に、全身あらゆる箇所に浴びせられ、マーキュリーは全身の神経に凶悪なまでの快感を流し込まれ、本物の電撃を浴びせられたのと同じようにビクンビクンと痙攣し絶叫を上げた。

「効果てきめんのようだな…さて、死んでもらうついでに貴様には最高のエナジーを提供してもらう。その体内に宿す戦士のエナジーを最高の状態で引きずり出すために、あらゆる抵抗も不可能なまでに快感に支配された状態にしてやる。これまで邪魔立てしてくれた制裁を兼ねてな！」

今にも黒炭に変わりそうなほどの凄まじい電撃に無抵抗のまま晒されながら顔を赤らめ絶叫し、悶えるマーキュリー。

「あああああッッ！！あああああああああッッ！」

全身の汗が吹き出し、やがて股間から汗ではない液体が溢れ両足を伝う。

（頭の中が…白くて…熱い！何も考えられない…ッ！）

普段冷静なマーキュリーはその知能が全く働かない状態で妖魔の言う快感に為すすべ無く悶えるしか無い自らの状況に絶望しながら孤独な空間で絶頂を繰り返した。

それから永遠とも思える間、快感電撃に晒され『女』としての感覚を、覚醒どころか作り変えられたと言えるほどまでに鋭敏にされたマーキュリーを、大の字に宙吊りにしていた拘束電撃が不意に解放し、糸が切れた人形のようにマーキュリーは元の真っ暗に戻った空間の地面に崩れ落ちた。

「そろそろ本番だ…貴様のエナジーをいただくとしよう」

妖魔の声が響くと突然周りに無数の蠢く気配が現れ、力無

「正義のセーラー戦士が無様なものだ…さぁて、お楽しみはこれからだ。
貴様の体内から直接エナジーを吸い出してやる。
人間では到底味わぬ、文字通り死ぬほどの快感を堪能するがいい！」

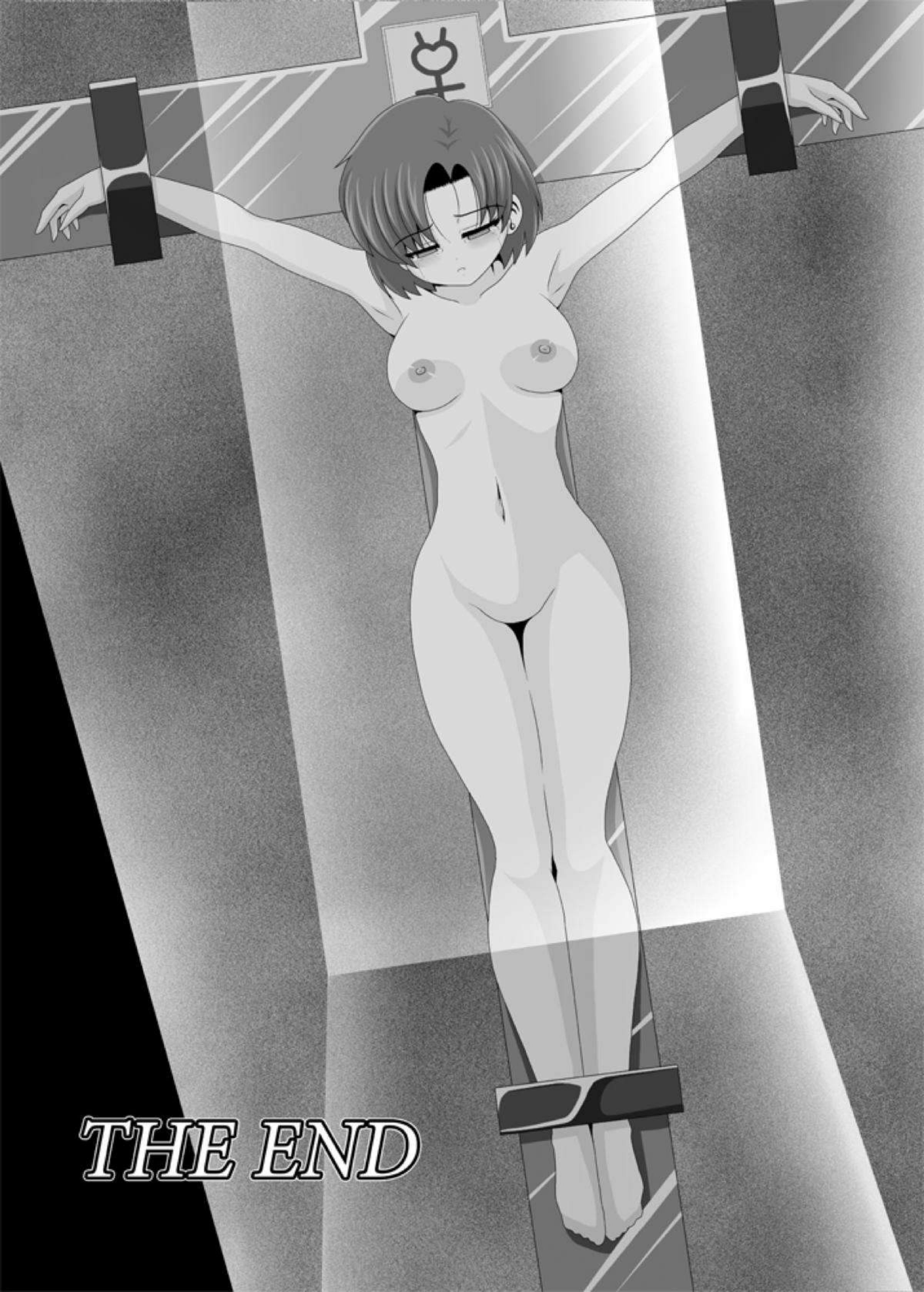
く横たわり、痙攣するマーキュリーに群がってきた。
物理的なダメージを与えるのが目的でないはずの快感電撃のあまりの威力にレオタードはぼろ布のようになり、既に本来の衣服としての意味を為さないあられの無い姿で身を投げ出され横たわるマーキュリーの身体に、群がってきた赤黒い蛭のような生物が絡みつき、今度は後ろ手に拘束された姿で再びマーキュリーは宙吊りにされた。
「ぁ…あぁ…」
半ば気を失っていたマーキュリーは不自然に自らの体勢が変えられた事で、おぞましい生物に自由を奪われている自分の姿に気がついた。
「ただエナジーを吸い殺されるだけではつまらんだろう、エナジーを奪いながら同時に更なる快楽を与えて楽しませてやるとしよう」
妖魔の声に反応するように電撃でむき出しになった両胸の先端に吸盤のような触手が口を開き接近してきた。更にマーキュリーに華奢な女体を舐め回すように何本もの触手がまとわり付き、鋭敏に作り変えられた全身をヌルヌルと撫で回し頭の中に直結するような甘い刺激を与え始めた。
「んはぁッ？！ぅあぁッッ！んぶッ？！」
信じられない快感とおぞましい嫌悪感に絶叫を上げようとしたマーキュリーの口を別の触手が塞いだ。
「ククク…これでもう許しを乞う事も舌を噛んで死ぬ事もできん」

不意におぞましい生物に口から体内に侵入され、目を白黒させるマーキュリー。そして息をつくことを許さぬようにか今度は乳首に張り付いた吸盤触手がエナジー吸引を始める。
「おッ…ごぼ…」
エナジー吸引で身体にかかる負担さえ快感を感じるほど全身の感覚が快感だけに変換・支配され、意識そのものを吸い出されるような感覚に白目を剥くマーキュリー、しかしそれだけでは足らず、今度は下半身に別の触手が近づくと、乱暴にマーキュリーの秘部と肛門に同時に侵入を始めた。
「〜〜〜ッッ？！〜〜〜ッッ！！」
エナジー吸引で失った意識を、女としての命を奪われたショックさえかき消す程の快感で無理矢理呼び戻され、虚ろな目を見開き、こもった悲鳴を上げるマーキュリー。
「正義のセーラー戦士が無様なものだ…さぁて、お楽しみはこれからだ。貴様の体内から直接エナジーを吸い出してやる。人間では到底味わぬ、文字通り死ぬほどの快感を堪能するがいい！」
マーキュリーの身体にまとわりつく触手が、そして口、秘部、肛門に侵入した触手のがマーキュリーの宿す水色のオーラを纏う、体内からのエナジーが始まったのである。
「……」
時に白目を剥き、時に蕩けた虚ろな半目で天を仰ぎながら絶頂による気絶と覚醒を繰り返し、エナジーを引きずり出されていくセーラーマーキュリー。その姿は最早凛とした正義

「美しいだろう？今に貴様ら全員をこうして並べてやる！
愚かな敗者の象徴として永遠にな！」
そして間も無く地球は滅びたのであった。

のセーラー戦士の面影は無い、女の本能の抗う事を許されず地獄の快感に溺れ苦しむ少女、水野亜美そのものであった。
「ハッハッハ！何という素晴らしいエナジー、そして素晴らしい眺めだ！喜べセーラーマーキュリー、貴様の死を皮切りにセーラー戦士は全滅する！あの世で眺め悔やむがいい、貴様が助けられなかったあの人間どもと共にな！」
途切れ途切れの意識の中で自分を単独で捉える為に人々が助からなかった事を聞かされ、マーキュリの頬には新たな涙が伝う。
（あの人達も救えず…エナジーを奪われ…戦況を一気に最悪な状況にしてしまうなんて…うさぎちゃん…みんな…）
自らを苛む無力感、絶望感すらかき消す殺人的な快感の前に悶えるしか無く、女として最悪の最期を迎えんとする事を悟ったのか、マーキュリーはただ真っ白に焼かれる脳裏の中で仲間の姿を思い浮かべていた。
「休むな、もっと苦しめ」
妖魔の声と共にクリトリスにこれまでのモノとは違う先端に針のようなものがついた触手が近づくと、先刻散々全身を弄んだ快感電撃をクリトリスに浴びせた。
「ー…」
既にいつ事切れてもおかしくない状態で更なる強烈な刺激を与えられてもマーキュリーは既に呻き声すら発しない。
（みんな…ごめん…ごめんなさい…）
どれだけの間続いたかも分からないほども絶頂を伴うエナジー吸引にマーキュリーの瞳は光を完全に失い、触手がエナジーを奪う際に発生するオーラも殆ど消失するほど薄い。
「さて、そろそろフィニッシュといこうか…残る僅かなエナジーを体内に深々と入り込んだ触手と同時に一気に引き抜いてやる、文字通り天国に送ってやろう」
妖魔はクリトリスに電撃を浴びせ、意識を覚醒させようとするが既に反応は無い。
「精神だけ先に逝ったか…まぁいい、こちらも十分楽しめた。トドメだ、死ねっ！セーラーマーキュリー！」
口、肛門、そして膣内へと、深々と侵入していた触手が一気に引き抜かれた。死にかけの魚のように力無く口をパクパクさせた後、マーキュリーは触手に解放され、無造作に放り出された。まるで壊れた玩具を捨てるように…

「妖魔？！マーキュリーをどうしたの？！」
司令塔を欠いたセーラーチームは簡単に戦力を分断され、リーダーのセーラームーンもまた簡単に異空間に囚われた。
「セーラーマーキュリー…『これ』か！さぁ、見るがいい！」
妖魔が悠然と応えると水晶にとじ込められた仲間の変わり果てた姿が映し出された。
「亜美…ちゃん…？」
「美しいだろう？今に貴様ら全員をこうして並べてやる！
愚かな敗者の象徴として永遠にな！」
そして間も無く地球は滅びたのであった。


THE END

劇場版セーラームーンR ラストより

セーラームーンR 65話　vsジャーマネン

ルベウス様、仰せの通り
クリスタルポイントの制圧に
成功、拠点にいた小娘を
数名始末いたしました

なお、その際戦闘となった
セーラー戦士の一人を
捕らえました。こちらは
クリスタルポイント
ダークパワー差し替えの
依り代といたします。

先程エナジーも吸い尽くし
変身も解除させました
あとは、この空の器に
ダークパワーを満たし、
このクリスタルポイントを
汚染するだけでございます

どうだセーラーマーキュリー
そいつらは貴様らセーラー戦士を
無力化する為に生み出した妖魔だ
そいつの粘液には強力な媚薬…
小娘の貴様にも分かり易く言えば
女が頭も身体も淫らに壊される
毒…といったところかな。
フフフ…お利口そうな可愛い顔が
随分と卑猥に蕩けているぞ？
どうした？自慢の知能も戦士の力も
こうなっては発揮できんかね？
そら、もっと悶えろ！

かれこれ数時間イキっぱなしでまだ正気を保っていられるとはな快感に疎な経験も耐性も無いままここまで持ち堪えるとは、さすがはセーラー戦士と言っておこう…だが既に立つ力も残っていまい、そら、立たせてやろう。

フハハ！まるで肉の十字架だな！処刑される愚かな小娘にはまさに似合いの姿よ！…よし、セーラーマーキュリーよお前はこの先も我々の玩具として置いてやる事にしよう。

だがその前に、その身体に宿す水星の力を全ていただいておかねばな。触手たちよ！その小娘が絶頂する瞬間にエナジーを奪え、簡単には吸い尽くさずジワジワと少しずつだ。…簡単には…死なせるなよ…？

それからどれほどの時間が経っただろうか
かつてセーラーマーキュリーと呼ばれた
その少女の光を失った瞳は、触手による
恐ろしい絶頂拷問により精神が完全に
破壊されている事を示していた

そして破壊された脳に直接
ダークパワーの信号を送り、
妖魔達は彼女を意のままに
動かせる、まさに人形として
作り変えたのである

ぱくぱくぱく

＜集結！セーラーマーキュリー討伐隊！＞

単独でいるところを狙われ、囚われの身となったセーラーマーキュリー。彼女を待っていたのは３人の上級妖魔幹部による、地獄の快感拷問だった！得意の頭脳戦もままならない圧倒的で殺人的な快感とエナジーの吸収。理性をたやすく焼き切る快感の炎に闘う少女は自らの女の身体を呪う。

決して許される事無く、精神を破壊され尽くした果てに美少女戦士はどのような最期を迎えるのか…？

あとがき

こんにちわ！初めましての方、初めまして！やえばです。
この度は当同人誌『プラネットバースト』をお手に取って
いただき誠にありがとうございます。

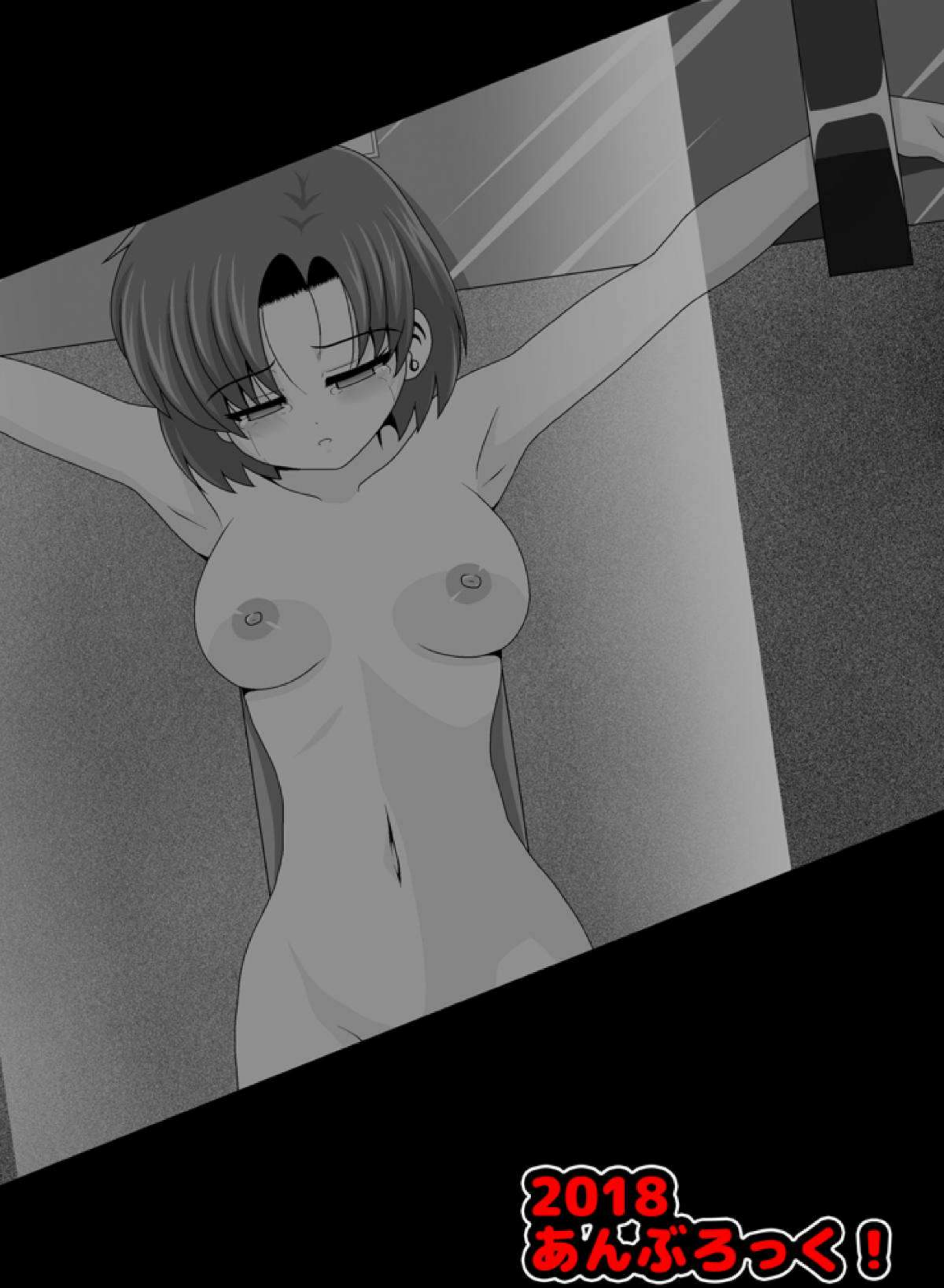
いつかは描けたらなぁと思っていたセーラーマーキュリー、夏に
電磁先生と遊んだ際に「急にセーラーマーキュリーが
描きたくなって…」とお話を聞いた際に「遂に来たか」と。
何を隠そう、私やえばの二次元最初の嫁キャラこそ
彼女、セーラーマーキュリーこと水野亜美ちゃんなのです。

そんな若かりし頃はまだ触手などにも割と抵抗もあり、ただただ
優等生な亜美ちゃんが好きだったわけですが、
今や闘う正義の女の子を倒す事が生業とも言えるほどまで
のめり込んだ『敗北ヒロイン凌辱』というジャンルにおいて
セーラー戦士ほど適したキャラはいないじゃないか！と、思ったら
いろんなものが一気に弾け、より長時間の描写がし易いSSにイラストを
添える形で、若かりし頃から変わる事の無かった亜美ちゃんへの劣情を
徹底的に叩きつけてやろうと執筆した次第でございます。
なお、タイトルも当時やってたドラゴンボール超武闘伝2の野菜王子の
メテオ技から拝借しております（その後で俺妹に同名のキャラソンが
あるのを知りましたw）。
なににせよ、今回は相当歪んだ愛情を持って執筆に臨みましたので、
その辺も感じ取っていただけると嬉しいかもしれませんw

一番の目標は
『若かりし日の自分が新たな性癖に目覚めたであろう強烈なやつを描く』
だったので、もしかして誰かがこの本でヒロイン凌辱に
目覚めてくれたりしたら万々歳！ですね♡

今回も電磁先生はじめゲスト参加くださったお三方のおかげで頒布に
漕ぎ着けられました、この場を借りてお礼申し上げます。
それではまたどこかでお会いしましょう。

奥付
■発行日：2018/12/31
■発行：あんぶろっく！
(http://blog.livedoor.jp/noguard22c/)
■著者：やえば（@yaeba209241）
■印刷：ねこのしっぽ様
(https://www.shippo.co.jp/neko/)


2018
あんぶろっく！